

# 1 『平成 18 年 7 月梅雨前線豪雨災害』による 岡谷諏訪地域透析施設の対応

諏訪赤十字病院 透析センター 降旗都 柳澤育美 五十嵐美都子  
腎臓内科 立花直樹 笠原寛 小口寿夫

## I はじめに

近年、災害対策の重要性とともに危機管理体制の見直しが叫ばれている中で、平成 18 年 7 月に起こった梅雨前線豪雨災害は、諏訪・上伊那地方に大きな被害をもたらした。岡谷諏訪地域では、じつに死者 8 名、重傷者 3 名、家屋全壊 8 件、半壊 16 件、床上浸水 786 件、床下浸水 1868 件（H18/8/1 現在）にものぼる被害が出た。私たちはかつてない災害に驚き、戸惑いながらも、あわただしく対応に追われた。

このような貴重な体験をし、今回の災害状況の実際を明らかにすることが今後の災害時対策の資料になると考えた。そこで、豪雨災害時の諏訪赤十字病院（以下当院）透析センター（以下当センター）の対応と、災害直後に行った諏訪の透析研究会で報告された岡谷諏訪地域の各透析施設（以下各施設）の状況をまとめた。

## II 災害の実際

平成 18 年 7 月 18 日、豪雨により一部道路が通行止めになり、その後も雨量は増え、19 日（水）早朝、岡谷湊地区に大規模な土砂災害が発生した。河川の氾濫により岡谷諏訪地域の広範囲が浸水、交通網の麻痺に陥り、当院の前の道路は膝の高さまで冠水したため、当センターにも大きな混乱があった。翌 20 日から交通規制は徐々に緩和されたが、道路事情が通常にもどるには数週間を要した。実際の写真を以下に示す(写真 1.写真 2)。

降旗都 諏訪赤十字病院透析センター 〒392-8150  
諏訪市湖岸通り 5-11-50 TEL0266-52-6111



写真 1 完全に冠水した諏訪湖畔の道路



写真 2 土砂に埋まった自動車

## III 当日の朝の対応

主に最も混乱した 19 日水曜の状況について説明する。当日、大きな災害と気づき、1 時間早めに出勤した医師、師長、ME 係長で話しあい、医師は透析センターに詰めて患者の対応をする、師長は災害対応と患者連絡、全体マネージメントをする、と決めた。

当センターは40床であり、当日は午前39名、入院している病室で行う病棟での透析が4名、夜間26名の予定だった。当日の朝決めた対応のポイントとして、①看護師が4名来れないため、MEを増員する。②浸水や交通規制で来られない患者は翌日の透析に移行する。③来られない患者がいることを想定し、通常より早めに、来院した患者順にプライミングし、透析を開始する。④外来患者は遅れてくるので入院患者を早めに入室させる。⑤スタッフ2名で行う病棟での透析を中止して透析センターでの透析としスタッフを確保する、とした。

#### IV 問題点および経過

①患者が来院できない、または来るのに時間がかかった。

⇒外来患者は病院に来るのに1時間～中には4時間以上かかったが、午前透析に来なかった患者は4名だけで翌日に移行した。夜間透析では患者1名を翌日に移行した。昼近くなっても連絡がない患者は、所在の確認を行った。直接に身体的な被害が出た患者はいなかった。

②スタッフの欠勤、遅刻

⇒看護師4名が欠勤したが、病棟透析の中止、MEの増員、入院患者の入室時間の調整、必要最低限のケアをするよう業務の調整をすることで対応した。

③電話での問い合わせが多く、混乱した。

⇒病院の代表の回線がパンクし繋がりにくくなった。電話対応は基本的に師長が行った。電話連絡の内容としては時間に遅れる、病院までの交通情報を知りたいというものが主だった。来院した患者から聞いてなるべく道路状況を伝えたが、交通事情はリアルタイムにはわからず、総務課に対応を依頼した。

④生理食塩水が不足した

⇒院内の在庫を確認し透析センターに回してもらい確保できた。

⑤患者、スタッフの弁当がない

⇒患者には業者と協力して事前に連絡をとった。スタッフにはカップメンなど非常食を調達し配布した。

⑥被災したCAPD患者の対応依頼

⇒たまたま帰省中のCAPD患者が被災してしまい、避難所から処置についての問い合わせがあり、医師がバクスターに連絡をとり処置・対応した。

#### V 岡谷諏訪地区の各透析施設の状況

災害直後の7月26日に諏訪透析研究会が当院で行われる予定であったため、当センターの災害時の状況を報告するとともに、各施設の状況を情報交換してもらうよう企画した。それによると、19日当日、透析できなかった患者の合計は26名であった。(諏訪赤十字病院：5名、諏訪中央病院：1名、岡谷塩嶺病院：1名、岡谷花岡医院：1名、宮坂クリニック諏訪：18名)

宮坂クリニック諏訪では本来、月・水・金のみ透析のため19日は休診し、全員を翌日に移行、諏訪共立病院では、床下浸水のため帰宅困難となった患者2名を避難入院とした。ほのほのクリニックでは、大雨避難指示で不眠・体調不良を訴える患者が出た。その他の施設からも、スタッフの欠勤、遅刻、患者の来院が遅れた、お弁当が届かなかった、などの報告があった。

#### VI 結果

①患者はかなりの時間をかけても病院に来たが、今回の災害をきっかけに自宅から近い透析施設を考える患者もおり、実際に数名が転院した。

②今回は可能な限りマンパワーと業務内容を調整することで対応できた。

③病院の代表電話に問い合わせが集中したための混乱に対し、災害時の問い合わせはセンター直通電話を使用するよう患者・スタッフの指導を徹底すること、交通その他の情報は各役所とLCVから総務課を通じてとっていくことが必要。

④電話対応や患者の実際の声から、病院にいけるだろうか、今日透析が出来なければどうしたらいいのか、遅れるが連絡がとれなくて困った、などの不安があった。スタッフは可能な限り励ましの言葉をかけていき、患者に大きな動揺や身体への影響がなかったことは幸이었다。

⑤災害直後に諏訪透析研究会で今回の災害についての情報交換を企画したことは有益であった。

## Ⅶ 考察と今後の課題

予期していなかった水害に対して、通常の業務と異なる動きや直面した問題に戸惑いつつも、限られた条件の中で、大きな支障なく透析治療を行うことができたが、地震対策とともに水害についても想定しておく必要があることを痛感した。

今回の豪雨災害では、当センター・各施設共に施設内の調整で対応することができたが、今後、大規模災害となった場合、広範囲での施設の連携は必須であり、日本透析医会災害ネットワークにおける訓練の重要性を再認識した。

当院では平成18年9月30日に病院の全職員で大規模地震を想定した災害シュミレーションを行った。当センターにおいても災害マニュアルを再確認しスタッフが災害時の実際の動きのイメージをつけることができた。来年度は新たにアクションカードを導入しての訓練を計画しており、今回の災害の経験を教訓とし、今後もより実践的な災害シュミレーション訓練に取り組んでいきたい。